

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	藤城 沙紀	指導教員 (主査)	田中 勝博

論文題目	死の語り体験におけるイメージ表現導入の意義に関する研究
------	-----------------------------

本文概要

本論では、死について語る際に「死のイメージ表現」を介在化させる意義を検討することを目的とする。第一研究では、基礎データとして言語による死の語り体験の特徴をインタビューデータの内容を踏まえて検討する。第二研究では、死のイメージ表現を用いて死の語り体験の特徴について検討する。

第一研究

方法 対象者は大学生 10 名（男性 4 名，女性 6 名）とした。個別に死について語ることを求めたインタビュー①を行い、その後死について語る体験についてインタビュー②を行った。インタビュー②を対象に KJ 法を用いて会話データを分析し概念化を行った。またインタビュー前後に「青年期における死に対する態度尺度(丹下, 1999)」全 38 項目 5 件法、「一般感情尺度(小川ら, 2010)」全 24 項目 4 件法を用いた質問紙を実施した。

結果 質問紙は元の尺度の因子通りに検定を行ったところ、両尺度の得点に有意な差は見られなかった。インタビューデータからは、69 個のキーワードが抽出された。そこから小タイトル 10 個，大タイトル 4 個【知的洞察】【気づき】【印象】【死のイメージ】としてまとめた。

考察 質問紙データの結果から、死の語りを調査協力者に求めた場合でも否定的感情が生じず調査協力者の精神状態に大きな影響を及ぼさなかったと推測される。インタビューデータに関しては【知的洞察】を中心とする関係性であると考えられ、【印象】や【イメージ】が【気づき】の過程に寄与し、その【気づき】が【知的洞察】に結びついていることが示めされたと考えられる。

第二研究

方法 新たに調査協力者を募集し、大学生 10（男性 4 名，女性 6 名）であった。第一研究と同様にインタビューを実施し、インタビュー①後に死のイメージの描画表現、描画後質問を行い、インタビュー②を行った。調査の前後には質問紙を行った。

結果 質問紙は元の尺度の因子通りに検定を行ったところ、両尺度の得点に有意な差は見られなかった。インタビューデータからは、抽出されたキーワードは 71 個，そこから小タイトル 11 個，大タイトル 7 個【気づき】【知的洞察】【描画表現】【意識化による変容】【喪失の再体験化】【感覚】【死に対するイメージ】としてまとめた。

考察 質問紙データからは、第一研究と同様に調査協力者への変化は見られないと思われる。インタビューデータからは、【描画表現】を中心とする関係性が考えられる。【描画表現】は【感覚】や【死に対するイメージ】を賦活化し、逆にその個人に内在化されている感覚やイメージ、描画表現や連想を活性化させていくと思われる。また【描画表現】は感情表出を促すという描画の機能から【喪失の再体験化】にも繋がっていると推察される。

総合考察

第一研究および第二研究から、イメージ画を介入させた場合のアプローチの特徴を考えると、イメージ表現を導入させることで、死の語り体験がより感情を伴うプリミティブな体験過程として知覚されることが推察される。死という漠然としたイメージを描画として外在化し、それを他者と共有して語ることで、生に意味をもたらす死を、感情を伴うような今ここでの体験として捉え得る可能性が推察されると考えられる。